

# 目 次

第一期生の卒業を前に	式部 久	2
<hr/>		
特集	49生(一期生)にきく	3
Part I 総合科学部研究序説		
1.	私の総科 一長・短ひとこと	3
2.	すすめたい講義・開講してほしかった講義	5
3.	私は言いたい 一個人的総科考察	5
4.	アンケート雑感	9
Part II 卒論のかき方教えます		
1.	卒論のテーマとその特色	10
2.	卒論を書きおえて	
	雑感	天野 雅郎 13
	卒論についての思い出	藤原 成幸 14
	これから卒論を始める人達に捧げる卒論対処法三箇条	洲崎 敏伸 16
	卒論の思い出	柏田 正博 17
Part III 就職と進学 一大学はでたけれど		
1.	今年度の就職状況	藤原 成幸 19
2.	資料	20
3.	アンケート<就職予定>	21
	<進学予定>	24
4.	先生方の談話	
	四つの大きな柱を	山田 浩 25
	ひらめきと人一倍のファイト	安田 三郎 25
	課題は理系の職場の開拓	鈴木 達彦 26
	きびしい女子の就職	村上 誠 26
5.	企業の声	NHK中国本部人事課 27
<hr/>		
自由投稿	アフリカからの通信	藤谷 昌平 27
	ブロイラーの鶏となるなかれ	石井 直人 30
学部の記録		31
編集後記		33

## はじめに

暗いうちから起き出して廊下の窓から外をみれば、それでも大気は少しずつ柔らかに変容してゆく。

電信柱の水銀灯も、やがて家々の窓にともる灯へと移ってゆく。人が起き出し、人が動き始める。生活を始める。

窓硝子は曇り水滴をもつ。シュンシュンと水が沸き湯気に曇るからだ。こうして家の空気は暖くなる。

(起き出した髪長い女の子は、おかあさんのひざにとんと座る。おかあさんは白い米飴を女の子にはおぼらせ、手にうすく椿油をのぼしながら髪をすく。三つあみにするためだ。今年の冬はいっそう椿があかく咲く。) (イメージは昔ばかりに固執する。)

あの家に住む人は何を思う人だろう。どんな顔をしているだろう。手を握ったら暖かいだろうか。戸をたたいてその生活を少しみたい気もする。

20年の生活は相当にその人をつくっている。4年あまりの新しい生活で人はなかなか変わらない。裏山の暖かい大きな石に固執する人もいる。伐採場の木の香りと冷飯の味に固執する人もいる。夕ぐれのチンチン電車あれが僕だという人もいる。それらをなつかしいといい、そこに「帰る」という人もいる。この4年間の事柄はやがてなつかしい場所を提供するだろうか。いやなかなか殺伐としたものでしたという人もいるかもしれない。

去られる人達。何をわたしたちのなかに残し、何が各人のなかに披露されることなくしまわれ、そのままに持ち去っていかれるのだろう。

新しく来る人たち。すでにその人格は相当に固まっているのだろうか。たたけば開けうるか。

こがね色の朝日が差すころザワザワと本格的に朝ははじまる。わたしたちにはもっと語ることがあるはずだ。希望とか未来とか。そしていつか肩組み「ラァラァ」とうたいたいものだ。

( N )

## 一期生の卒業を前に

式部 久

総合科学部待望の第一期生がいよいよ卒業することになった。大学院進学の諸君をのぞいて進路もあらかた決定し、この不況の時期としては相当な成績という。平和な時代にむけての諸君の門出を心から祝福したい。

卒業生の進路は教職員にとっても大きな関心事だった。学部創設の成否をはかる一つの物差しと考えられたからである。本人の努力はもとよりだが、教職員、とくに就職委員会の尽力に対して、心からの敬意を表さなくてはならない。

第一期生としての諸君にとっては、学生生活そのものが困難やとまどいを伴ないがちであったに違いない。教職員のあいだでさえ、出発時には、具体的な面でどれほど共通理解があったか不確かな実情では、それも止むを得なかったであろう。カリキュラムの修正が毎年行なわれた。教官陣容の整備も、平均して一年以上学年進行におくれていた。施設にしても同様である。

万事不如意であった。教職員にしる学生諸君にしる、ひとひとそれぞれの仕方で不如意を感じていたことと思う。だがそれだけに、困難を打開しようとする熱気が、学部内に漲っていたのを私は感じるのである。環境科学コースの学生が、内容充実を求めて要望書をまとめたのも、そうした熱意の表れであろう。

そうした創設期の不如意や不安定さを乗り越えて、諸君が卒業と呼ぶにふさわしい力を身につけてくれたことは、事に当たる者としてこれほど嬉しいことはない。成熟期よりむしろ揺籃期にこそ人物が輩出するという。私もそれを信じそれに期待したい。

もちろん総合科学部の評価がこれからのわれわれの努力に待つように、諸君にとっても、卒業は一つの出発点にすぎず、すべてはこれからだといって過言ではない。人間としての修業は、まさにこれから始まるのだといっていい。そして実際、諸君が学ぼうとする姿勢をもつかぎり、実生活は、正負両方向において豊富きわまりない教育材料を提供してくれるものである。

正負両方向といったが、むしろ重点はプラスの方

向におきたい。とかく批判はたやすいが実行はむづかしいものである。もし身边に、学ぶに値する人間を見つけたならば、徹底的にその人物から学び、人間としての幅をつけるように心懸けたい。魅力のある人間がいないというのは、あるいは見る目、感じる心をもたないということかもしれない。

積極性がほしいのは仕事についても同様である。できることかできないことか、それが定かでないときは、むしろできる方に賭けたい。そう信じることによって、そうした努力を重ねることによって、危ぶまれたことが実現できる場合も多いからである。人間の世は、自然の世界とちがって、当事者の心のむけかたに懸る面を多分にもっている。諸君よりいくらか長く生きた私の実感である。

といて私はこれらのことを、私がそう生きたこととして諸君に語っているのではない。むしろ、そうありたいと願ってきたこと、いまでも自分にそう願っていることとして語っているのである。私の現実はこの願いを絶えず裏切ってきた。だが、それでいて、こうした願いをもちことは、実際の行動に何程かの影響を及ぼさないではない、とも思うのである。

わが道を往く。それでよい。だが、前を向いて歩こう。そして数年後には、また一段と力を増した諸君と、再会を喜びたい。

里帰り (home coming) というのはいいことばである。五年、十年といった節目ごとに、そういう機会を作って、互いに新しい経験を語り合い、友情を確かめ合うようにしたいものである。日本の大学では必ずしもそうした慣習が確立していないようだが、諸君の代からそれを始めてもよいかもしれない。

諸君を送り出した総合科学部の方も、その頃までには、名実ともに第一級の研究教育機関として、内外に認められるものになっていることであろう。